

中瀬 有紀



Morimoto New York: 88 10th Avenue New York, NY 10011
安藤忠雄氏デザインのレストラン。17,400個のプラスチックボトルの奥にLEDが光る“Bottle Wall”と、絹のようになめらかな手触りのコンクリート柱。

音楽家のヴォルフガング・レオポルト・モーツァルトと建築家の安藤忠雄氏、この二人の共通点はPresentです。英単語Presentは、名詞の「贈り物」という意味の他に「今」「現在」形容詞の「存在している」という意味を持ち、モーツァルトと安藤氏の作品は時代と文化の「今」を表現しています。

モーツァルトが生きた18世紀後半の欧米は、革命と戦争の50年といえます。オーストリア継承戦争に始まり、七年戦争、マイソール戦争、アメリカ合衆国の独立、そしてフランス革命。その混乱期に、モーツァルトはバイオリニストであった父、レオポルト・モーツァルトから音楽を学びました。レオポルトの教えは「聴衆の好みに合う音楽を作れ」でした。モーツァルトが作曲した多くは、その時代に求められた音楽を象徴しています。

1941年、アメリカと日本が正式に第二次世界大戦に参戦した年、安藤忠雄氏は兵庫県に生まれました。戦後復興の50年代は大阪で祖母から生き方を、そしてボクシングから情熱を学び、人々が物質的充実感を得るようになった60年代は、1964年海外渡航の自由化と共に西洋建築を彼の目で

Be Present

確かめる旅に出て、1969年に「建築という職業を持って社会の理不尽に抵抗していく」ために安藤忠雄建築研究所を開いたと、著書「建築家 安藤忠雄」にあります。彼自身の長屋暮らしの体験と、海外から得た国への客観性が、各国の文化に即した光空間の構築に大きく影響しています。

時代に求められたモーツァルトの音楽と、人と人、また人と建物との対話が生む安藤氏の建築は、とても舞台芸術に似ています。照明デザイナーも現場では常にPresentでなければなりません。与えられた空間で、共同制作者と共に作品に対して何ができるかを、その空気の中で創造します。アメリカの舞台制作において、照明卓のオフラインデータを持ち込むよりも、テクニカルリハーサルにてゼロから明かりを作るほうが好まれるのは、常にPresentに身をおくためです。自分の発想と現場の空気を混ぜ合わせ、一場面の明かり作りに要する時間は約三分だと聞きました。

時代に合った発想のほとんどは前例がありません。なぜならPresent「今」そのものに前例がないからです。前例を必要としない自信と余裕が、デザイナーと社会に求められています。